

令和つれづれ草

金子熊夫

瀋陽での 衝撃と癒し

ちなみに、この残留孤児問題については、その後、私自身が瀋陽（旧満州の奉天）を訪れた時のことも書いておかねばなりません。周知のよきこと、瀋陽郊外の柳条湖は、1931年9月18日（そこで旧日本軍による鉄道爆破事件が起き、日中15年戦争勃発の契機となった）ところですが、その現場に「9・18歴史博物館」が建てられています。建てたのは、胡耀邦の後を継いだ江沢民政権時代で、江直筆の「勿忘国耻」の4文字が正面の外壁に大書されており、館内には、日中戦争時代に日本が犯したとされる様々な残虐行為が蝸（こ）人形や現場写真などを使って生々しく展示されています。

複雑な歴史を振り返るとき、忘れてはいけない1つの視点であると強く感じました。

胡耀邦時代について、ついでにもう一つ特筆しておきたいことは、彼が1983年に来日した際に、日本の青年3000人を中国に1週間招待するプランを披露して日本側を驚かせたことです。また、中曽根康弘首相と

中国とどう付き合っていくべきか

時とは、「兄弟のよう」に非常に親しい仲だったと自ら述懐しており、来日中には中国の首脳と



して唯一広島島の原爆ドームなどを視察しています。このような指導者が1980年代の中国に実際に行ったことは記憶しておくべきだと思います。

天安門事件ですべてが一変

ところが、胡耀邦の政治改革は、保守派の強烈な巻き返しに会い、徐々に勢力を失い、ついに1987年に総書記を解任



天安門で戦車に立ち向かう学生



天安門広場の夜景

近年の中国共産党の態度、とりわけ香港の民主化運動弾圧、国内の少数民族の処遇、東・南シナ海での強権的態度、さらに、前回の拙稿の冒頭で触れた新型コロナウイルス感染問題への取り組み方や、えげつない「戦狼外交」等々を考えると、30年前の日本の対中外交は、果たして妥当であったと言えるのかどうか。厳しい歴史的再評価を免れないと思います。

もし日本も対中制裁していたら

こうした30年前の日本政府の一連の判断が正しかったかどうかについては、様々な見方があり、現在でも議論が分かれるところです。あの時欧米諸国と一緒に叩いておくべきだったという意見もあ

たが、中国の国際社会での地位は低下したまま、その後の飛躍的な経済発展は不可能だった。少なくとも20年か30年は遅れていたかもしれせん。

エネルギー戦略研究会会長、元国連環境計画アジア太平洋地域代表、元東海大学教授（国際政治学）、新城市出身、84歳。